

常なる磐

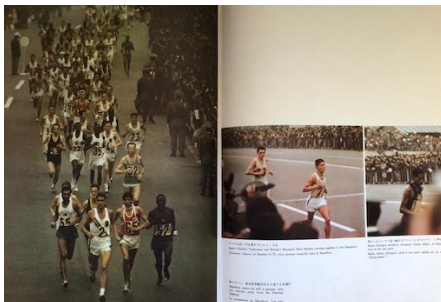
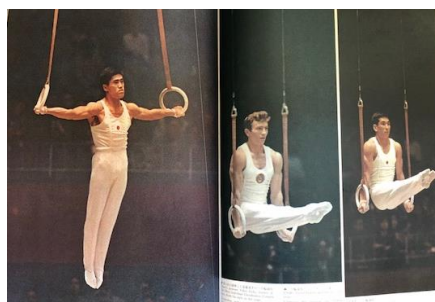
つねなる いわ season II

令和3年9月24日(金)
その2

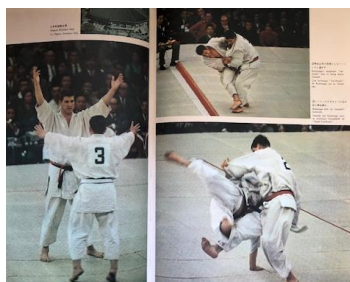
◇ 東京オリンピック よもやま話

先日、第24代校長 荒木俊夫先生が来校され、学校に贈り物をくださった。
共同通信社発行「TOKYO OLIMPIAD」1964東京五輪の記録をまとめた書籍である。

今から半世紀以上前の貴重な冊子だ。価格も当時で10,000円とある。現在との貨幣価値をCPIで比較すると今は4.43倍。現在なら44,300円となる。保存状態もよく、価格以上の価値がある。



校長室で保管しているので、閲覧したい場合は一声かけていただきたい。



柔道の写真を比較してみた。
左が1964、右が2020(Number)
記録写真とグラフィックの違いが明確に分かる。味わい深いのは記録写真。適度に粗く、人



物や柔道着、畳の陰影を生み出しているのは、フィルム写真の特徴によるもの。

柔道競技初採用の東京五輪 1964 では、神永がヘーシンクに敗退したことが日本にとって大きな衝撃だったが、日本のメダル独占でなかったことが存続につながったとも言われている。神永の背中には「3」。ゼッケンが「背番号」であるのが妙に新鮮である。柔道着は余裕があり、だぼっとした感じ。組み易そうだ。

東京五輪 2020 を振り返るのにお勧めなのが、【Sports Graphic Number】だ。細かな取材を通して、表出されなかったエピソードを織り込み、競技者の人間模様を巧みに描いている。

例えば、「柔道男子 66kg 級 金メダリスト 阿部一二三(あべ ひふみ)」。少し前なら、一二三と言えは「ひふみん」こと、元棋士の加藤一二三だったが、オリンピックイヤーの今は、阿部一二三だ。

記事には、この名前の由来が紹介されている。名付けたのは消防士である父親。父は、道場に行くのが怖くて泣いてばかりいた一二三少年に、言葉をかけ続ける。

『人ははじめから強いのではない。踏み出す一足一足が強さをつくる。
一二三という名前には、そうした願いが込められている。』

決勝戦、試合終了のブザーが鳴り、勝利を決めた瞬間、阿部一二三は表情を変えことなく、ガッツポーズもせず勝ち名乗りを受けて、相手に礼をした。

『いろいろな人のおかげでこの大会を開催してもらうことができた。そういうことを考えると、しっかり顔を上げて胸を張って、礼をして畳を下りようと思いました。』



そして、畳を下りた瞬間、込み上げるものにこらえきれずにコーチの下で表情を歪ませる。

よくぞ我慢した。天晴(あっぱれ)一二三である。阿部一二三は、試合を勝ち抜く体力的強さ、技術力だけでなく、精神的な強さも身に付けていたのである。

阿部一二三と兄妹同日金メダルに輝いたのが、妹の阿部詩(あべ うた)だが、彼女の強さが見えた瞬間がある。合わせ技一本で勝利をつかんだ瞬間、阿部詩は、一二三とは対照的に表情を崩して何度も畳を激しく叩いた。強さはここではない。

涙にぬれたまま畳を下り、続く勝利者インタビューでも涙。その途中でスイッチが入ったようにぴたりと涙が止まる。それだけではない。表情もがらりと一変した。『これから兄の決勝なので…』。心のスイッチングカに拍手。

さて、阿部詩 Number エピソード。試合当日の朝、母親から贈られたのは一言。『一緒に戦ってるよ』。いい話。

兄妹愛ばかりが取り上げられる阿部兄妹。

けれども、阿部兄妹を見えない部分で支えていたのは、紹介したように父親と母親。両親の存在だった。

